

狼男にさよならを

まれてきた子を死んだことにして、村から離れた炭焼き小屋の納屋に隠して育てました。男の子は納屋の中という狭く暗い世界でだけ生きていましたが、お母さんがいたので寂しくはありませんでした。

ではある日、お母さんがいつまで経つても納屋に来ないので、男の子はお母さんの言いつけて破つて納屋の外に出て行きました。生まれて初めて見る広い世界に男の子は感動し、けれどそんな広い世界に一人でいる事が怖くなつたので、お母さんを呼びながら村へと駆け出しました。

村の中心にある広場、そこにお母さんはいました。男の子はお母さんを見つけて安心したのか、泣きそうな顔を満面の笑みに変えて近づいていました。お母さんは男の子の姿を目に留めると、酷く疲れていた顔を青白くして、震える声で「何故納屋から出てきたの」と、叫びました。お母さんの言いつけを破つた事を怒られたと思ったのか、男の子はびっくりとして立ち止まりまつてしましました。けれど、お母さんは男の子を叱るつもりで叫んだ訳ではありませんでした。広場の周りの家から隠れていた沢山の大人が飛び出してきて、男の子を取り押さえ始めました。見れば、お母さんは足を縄で縛られ、その縄は地面に打ち込まれた杭に繋がっていました。男の子は初

めて見た大勢の人達にのし掛かられて、訊も分からず泣き叫ぶことしか出来ませんでした。お母さんはその子を離してと泣きながら訴えます。お母達から、汚れた子を皆に隠して育てていた事を責められるだけでした。

そうして、お母さんは村の生家に閉じこめられ、男の子は村を追い出されて、二人は二度と会うことはありませんでした。男の子に残されたのは、お母さんから貰った名前と、出て行くときに巻き付けられた、ぼろ切れ同然の服が一着だけでした。

獣の血を受け継いだ男の子は人の群れを追い出されました。けれど、男の子が追い出されてやつてきた森に棲む獣達も、人の血が流れる彼を受け入れることはありませんでした。彼が持つ血である狼ですら、男の子を迫害しました。それからずっと、男の子はたった一人で生き続けていきました。生まれた地を離れ、大陸を横断し、海を越えて遙か東の島国すら見て回り、数百年かけて生まれた地に戻つてから後も、それは変わりませんでした。

以前モーレントの昔話を聞いた後、悲しむよりも迫害した当時の村人と獣達に怒っていたクリス

に、モーレントは困ったように笑いながらこんな話をし始めた。

「獣と鳥の特徴を両方持つていてコウモリは、舞つていたら、その内両方から仲間外れにされ、洞窟の中でしか生きられなくなつたんだそうだから、泣き入っては貰えません。それどころか村中の人達から、汚れた子を皆に隠して育てていた事を責められるだけでした。

涙が涸れ果て泣けなくなり、乾ききった笑顔

を向けるモーレントを見て、クリスは彼の昔話を教えて欲しいとせがんだ事を後悔した。そして、何故か胸が締め付けられるような悲しい気持ちになつた。

モーレントが自分の身の上話をしたのはそれっきりだった。それから後は、モーレントがこの地を離れていく間に目にした沢山のモノについての話をしてくれた。クリスの住む村とは比べものにならない位大きな都市。道の代わりに水路が張り巡らされた町。ただひたすらに広がる砂の大地と、そこに建つ白亜の宮殿。モーレントが狼の姿で丸一日全力で走り続けても終わりが見えないほど長く伸びた城壁。十字教の威光も届かない、未だ古いから安全なのだ。

モーレントはお別れだ。ここは角度的に村からは死角になつてるので、見つかる心配がないと言ふ、ここまで来れば危険な獣の類は滅多に出ないから安全なのだ。

クリスは後になつて知つたことだが、彼らはこのより南の町を根城にしていた山賊で、帝国軍の大規模な討伐で北へ北へと追いやられた残党だつた。よく見れば誰もが疲弊した顔をしていたのだが、そんなことに気がつく余裕なんて誰にもなかつた。

クリスは後になつて知つたことだが、彼らはこの中に響く怒号と悲鳴、馬の嘶きや誰かの断末魔。クリスはそれらを、へたり込みながらどこか壁一枚隔てたような意識で見ていた。斬り殺される男の人。殴り殺される老人。踏み潰される子供。服を破られ、その場で犯される女の人。頭に布を巻いた、明らかに山賊といった風体の者達。その銀色だった。

浮いた時間でモーレントの話を聞くのが、クリスが村のみんなに内緒にしている密かな楽しみなのだ。

決して、村の誰にもバレてはいけない。特に、教会の神父様の耳に入ることがあつてはいけないのだ。モーレント個人の事など斟酌することなく、人狼は邪悪な存在であるとして、教会騎士団を呼

「今日は色々なお話を聞けて楽しかったわ」

「それはよかったです」

「狭い山道を、肩を並べて降りていく。山に囲まれたこの土地は、平地よりも日暮れが早い。暗くなる前に村に戻らなければ怪しまれるし、心配をかけるのはクリスの本意ではないのだ。建前上は木の実を取りに行っている事にしているので、昼食が入っていた籠には木苺がいっぱいに入っている。モーレントが何処に沢山生えているかを知っているから、山をあちこち探し回る必要がない。

「うん。話の続きをまた今度」

丘に立つモーレントに手を振りながら、クリスは村へと帰っていく。お話を続きを想像して、次に山に入る理由はどうしようか、と考えながら。けれど、クリスはまだ知らない。「また今度」なんて約束が果たされる保証なんて、この世の何処にもないのだと言うことを。

クリスは後になつて知つたことだが、彼らはこの中に響く怒号と悲鳴、馬の嘶きや誰かの断末魔。クリスはそれらを、へたり込みながらどこか壁一枚隔てたような意識で見ていた。斬り殺される男の人。殴り殺される老人。踏み潰される子供。服を破られ、その場で犯される女の人。頭に布を巻いた、明らかに山賊といった風体の者達。その銀色だった。

たすために会いに来たんだ」

この日、ベッドの上で寝ていた祖母が忽然と姿を消した。村中総出で山狩りまで行つたのにも関わらず、その痕跡すら見つけることが出来なかつた。

祖母が何故いなくなつたのか……その理由を知る者は、私を除いて一人もいない。

羽が朽ちた天使が叫ぶ

人間科学部
人間科学科 2年

守山 文也

金属を打ち合わせたような音が耳に入り、目が覚めると、そこには見渡す限りの青色が広がっていた。はて、この青色は何だろうか——と思いつを巡らせ、それが空であることに気付くのには時間はかかるなかつた。では、何故空を見上げているのかと言えば——記憶を手繕り寄せる。そういえば、確か昼休みに屋上で眠つていたからだろう。

そこで、現在の自分が置かれている状況に気が付いた。そう、私の眠りを妨げたあの金属音は、五限の始まりを知らせるチャイムではないか。

私は小さくため息をつき、仰向けから上半身を起こし、地べたに座る態勢に移る。この調子だと、五限には間違いなく間に合わないだろう。どうやら、思つていた以上に気持ちよく眠り過ぎていたらしい。そう結論づけた私は、出席することを諦めて屋上でゆつくりとサボタージュすることに決めた。六限には出席するが、五限はサボる。そうしよう。

そうと決まれば話は早い。今日は確かに購買自らだけが優雅にランチタイムなのだと考へる

で昼食を買つた後、屋上に来て食べる前に眠りに付いた筈だ。脇に置いていたプラスチック袋から、お目当ての物を取り出す。

「あつたあつた。クリームパンと、ミルクティー」紙パックのミルクティーにストローを刺し、クリームパンの包装を開ける。頂きます、と小さく呟いてクリームパンに一口、二口とかじり付く。

中のクリームの上品な甘さが、パンと混ざり合つて口の中一杯に優しく広がる。まさに絶品である。いまいちパッとしてない購買で売つているパンの中でも、クリームパンだけは別格だ。

半分ほど食べた所で、ミルクティーのストローに口を付けて飲み始める。こちらは、至つて代わりのないミルクティーだが、それでも並以上の味はする。元々、私がミルクティーを好きだというのも理由の一つだろう。

「……なんだ」

強ばらせた体の緊張が解けた、だけだ。この時間帯で屋上に来たという事は、彼女もサボリなのだろうと思い至つたからだ。

に、しても随分な美少女である。こんな美少女がサボリとは、人は見かけによらないものだ。美人でも不細工でもない、普通の私からしたら羨ましい容姿である。

117 PLUS i